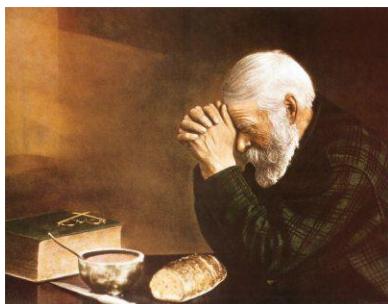




ミレー 晩鐘

## 2026年6月7日 説教「失望せずに祈る」

ルカの福音書 18 章 1~8 節

ルカの福音書の学びも 18 章へと入っていきます。

### 1. 失望してはならないと (14~15 節)

#### ①失望せずに (1)「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエス彼らにたとえで話された。」

この節にある主イエスの「いつでも祈り、失望してはならない」というお言葉は「絶えず祈りなさい」(1テサロニケ 5:17)というパウロの書簡の勧めにつながっていきます。そして、主イエスはこのお言葉の理解のために、たとえ話をもって話されます。以下のたとえ話からは当時の社会背景をうかがい知ることができます。

#### ②神を恐れない裁判官の譬え (2)「『ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。』」

イエスの時代の裁判にはサンヘドリン(ユダヤ人議会)でおこなわれました。裁判官には報酬は支払われず、裁判官が報酬を受けた場合は無効となったとのこと。ユダヤの裁判をするのには、目撃証人二名が不可欠でした(民数記 35:30)。イエスは裁判官について、お話の中で数回用いられます(マタイ 5:25、ルカ 12:14, 58)。ルツ記の時代、町の門の辺りで、ナオミとルツの買戻しの権について、町の長老十人が登場して裁判がなされています(4 章)。イエスが十字架につけられる前には、ピラト総督により形ばかりではありますが、ローマ帝国の下に裁判が行われました。今このたとえ話においては、一人の裁判官が登場します。彼は、神を恐れない不信仰な人間でした。そればかりではなく、人を人とも思わない冷淡な人だったといわれます。

#### ③やもめの求め (3)「その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守って下さい』と言っていた。」

一方、その町にひとりの悩める女性がいました。夫を失った人でした。そのやもめが、横柄で無情な裁判官の所にやって来て、願ったのです。「私の相手を裁いて、守って下さい」。相手とのトラブル内容や訴えている点は不明です。彼女は依頼が難しそうなこの裁判官のところに、敢えて、臆せずやってきたのです。また、熱をこめて執拗に、お願いしたのです。断られても、諦めずに何回も願ったのです。

### 2. 裁判官の対応 (4~5 節)

#### ①取り合わなかったが (4)「彼は、しばらくは取り合わせないでいたが、後には心ひそかに、『私は神を恐れず人を人とも思わないが、』」

執拗にやってくる女性に対して、当初裁判官は無視していました。彼は、自分は神を恐れず、人も全く恐れない、と誇っていました。だから、このやもめに圧力を加えて、追い払うこともできる。しかし、むやみに違

法なことではできないとも思ったのでしょう

- ②裁判をしてやることに (5)「**どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。**」

とはいえ、取り合わないでいても、やってくる女は、諦めそうにもありません。何度、退けてもまたやってくる。面倒くさかったことでしょう。それに、その一途で懸命でひたむきな求めに対して、心が動かされる面もあったのかもしれませんが。そして、ついに、裁判官は折れたのです。この女のために、裁判を開いてやることにしたのです。

- ③そうでもしないと (5)「**でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがないと』**と言った」

そうでもしないと、これからもひっきりなしにやってきて、仕事にならないし、そこまで言うのなら、助けてあげるのも一つか、とぐらいいまで思うようになったのです。たとえ話はここまでです。

### 3. 主のまとめ (6～8 節)

- ①裁判官の言う事からの学び (6)「**主は言われた。『不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。』**」

主は言われます。この不正な裁判官の言っていることを聞きなさいと。ここでは「不正な」裁判官と、イエスは言い直されています。この裁判官は、神の前にも人の前にも不正を行っていたのです。裁判官としての資格が怪しいともいえましょう。ここでは悪賢い人という意味も込められているのでしょう。このやもめの将来などいくらでも無視できました。しかし、その裁判官の心が、熱心な求めによって、心を動かされたというのです。ここに焦点があてられています。裁判官の言葉にそれがうかがえます。

- ②夜昼求める選民のために (7)「**まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。**」

主イエスは不正な裁判官の行動と正義と慈愛の神を対比して述べられます。つまり、人のことなど気にかけない裁判官すら、一途な求めをするやもめの求めを受け入れたのです。まして、慈愛に富んだ神は選民（神を信じる者、クリスチャン）の熱心な願いについて、それを聞かれないということがあるのでしょうか、と教えておられるのです。

- ③神はすみやかに (8)「**あなたがたにも言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰がみられるでしょうか。**」

主なる神は、時を移さずに答えを出してくださいます。主は恵み深いのです。そして、キリストの再臨の時には、どれだけの民が信仰をもって、お迎えするでしょうかと述べておられます。17 章において、「人の子の日」に教えて下さった主が改めて、どの時にも信仰を忘れてはならないことを付け加えておられるのです。

《結論》 今朝の聖書箇所のとえ話はマタイの福音書 7 章 7 節を連想させる。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」。「求めなさい」と「たたきなさい。」というお言葉の実践のお話と言っても良いのではないのでしょうか。登場するやもめは、相手を裁いてもらうために、人を人とも思わない裁判官の所の門をたたいたのです。断られても諦めずに、何度も何度も通いました。そしてついに、裁判官の心は動かされ、裁判をしてもらうことになったのです。彼女は「求めに求め」「たたきにたたいた」のです。

イエスはこのお話から、不正な裁判官の冷酷な心すら開いたのだから、クリスチャンが恵みの神に熱意をもって祈るとき、耳を傾けないはずがあるだろうかと問われています。そして、「神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます」と言われて、その御愛によって、その求めについてのお応えをくださると明言されているのです。

あなたには求め続け、たたき続ける信仰がありますか……。エルサレムの羊の門近くにあったペテスダの池の中に伏せっている人がいました。その人は 38 年もの間、病気にかかって自分では自由に歩くことができなかったのです。主の使いは時々その水を動かしました。そして最初に入った者を癒されていました。そこで池には人々が集まっていました。イエスは絶望する彼に「良くなりたいか」とたずねられました。彼は「水がかき回された時に、誰も池に池の中に入れてくれません」と答えました。イエスはただ「床を取り上げて、歩け」と言われると、彼は歩きだしたのです（ヨハネの福音書 5 章）。この男は、長い間の苦しみのゆえに、求める心も萎えていたことでしょう。同じように、長期間にわたる病気、抱えるハンディキャップに苦しみ、なおらない悪癖、長年にわたる罪、悪化した人間関係などに嫌気をさしている人もいましょう。生きる限り人には悩み苦しみがあり、失望落胆がついてきます。

そんな者たちに、主イエスは、「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」ことを教えておられます。たとえ話を通して、失望せずに祈り続けることが、私達にできることだと諭しておられます。

世界宣教の父ウィリアム・ケアリーが「神に大きなことを期待せよ。神のために大いなることを企てよ。」と言ったことは知られています。失望するような事態に置かれていても、大きな期待を持って祈るなら、神ご自身がお助けくださることを信じていこうではありませんか。そして、大胆に願い求めていこうではありませんか。私もあることで、長年祈られたことがありました。いろいろと努力もしました。しかし、なかなか答えが与えられず、それが開かれていった道筋は、考えてみないものでした。人の理解を越えたことをなして下さる、主にご信頼して祈っていこうではありませんか。

私達は失望、落胆しやすい者たちです。いつのまにやら、不信仰になって思い煩ってしまいます。しかし、「失望せずに祈る」という教えは、祈りこそが失望を希望への橋渡しなのだとして示されています。祈る時に、聖霊が豊かに働きやすくなり、道が示されていくのです。失望せずに祈っていきましょう。